857
118

源氏二十巻抄

十五

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第十六

目録

夕霧

浮舟

帝国図書館

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

夕霧　女三

（マヽ）
（ヲ）
（ヲ）
（ヲ

恵心(エシン)僧都の不及(およば)さし給(たまふ)ことを元
ちうそ(ちうそ)ゆうこと 指(さす)尾(を)末
并(ならび)に表(おもて)もて 指(さす)の下(した)に書(かき)給(たまふ)
すること
あとのかなり あん部(ぶ)くみめさだ(さだ)く聞(きこ)えてやう
らうそ(らうそ)とも 扨(さて)は伊勢(いせ)物語(ものがたり)二(に)并(ならび)ていまそ
と云(いふ)わさとくもりて不(ず)定(じやう)元(げん)あくまでもわさとそ
結(ゆ)すとも 越(こし)井(ゐ)手(て)
濱(はま)衣(ころも)
こと。くしき給(たまふ)さま 大(おほ)なれもなり
ここう 女二(にのみや)の代(よ)うに書(かき)給(たまふ)へきを
かの御(おん)事(こと)さとう 雲井(くもゐ)雁(かり)しる(しる)せ
も月(つき)十日(とをか)ほとう 中(ちう)旬(じゆん)や 中旬や
なにのこと 住(すま)所(かた)の指(さす)傷(きず)とする
松(まつ)の緑(みどり)とも さ(さ)れ岩(いは) 名(めい)誉(よ)
一(ひと)文字(もじ)さうなり
あうもまさうそ(まさうそ) 奥(おく)や 小野(をの)の雪(ゆき)并(ならび)に弥(いや)なり
てこと三(にのみや)のかく 住(すま)吉(よし)の汚(けが)し
今(いま)も 傘(かさ)や
わさら世(よ)紗(さ)ひし 夕(ゆふ)詞(べ)
指(さす)の下(した)にらひ 小野(をの)山庄(さんざう)
さうそ(さうそ)あること 女二(にのみや)とおほ(おほ)

あなたの　御息所乃おこるを
きゝ給ふれ　ゆるしやをとこ
柔のみことなり
年比と　指折三年うち成ぬ
又こうなるそのゝふみ
好なんなとなくそおくそうとう
いさやうむなきとおもひまんとなり
うからうれて　位等も
ありのまゝさう　ありのずいと云事あり
すくぶくもうをれく　女二うむのすくしてあるタ乃男と
けとも　うとをおれてとむ
けふいやなるつう　女房京れ
こゝろうつ雲の　浦風不の垂籠(タイコメ)
ねゝ(ツイ)とえあつうひねうち　女二
とや抱のけれおそろきて
夕へ北野出をり
こゝを宮の　宮れうて夕右雲で
当不のふはうち　夕九討　六
欲をくさせ給もそ夕のうそ
すうを柔(ヌケ)れ　抱とおやし
それくしく成まてそたのう
まうて可給ふんとなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

たうとめふとうの御息所のたあつりてみやすところに
本院をーつのゆり　夕のるをの
たうとめとをタとやすす　あとの事ー元推量仕うる
まてうんぬ　上とうる
さあなさま　御息所へ
参給ふうみやすところに
志のりて伝ふうまつり　立舞公
ものは　引き也
きりてうんかさを　夕顔
山里北宮・夕也　むかしの
雖レ恋タ妻屋人牧只覚知ス　御息所
逃なるやうしハ儒者乃ふ
山のへ北宮　むかしなる夕のありきむあるを
とりへてさやうの人をとめーとや　妻乃もむれう
とくおさやうの後なるをめ
更るかハ北月あるをとうこ
をあかまー死ぬうるなる
本宮なるわさ　あなる
気後をみしを　曹司とうへヤ
をこと事実ども　左馬頭
やうもせ　逾　日本紀
をいうをとめむなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

作きさう死人を 此作きさうまは覚許おこと云詞也
寄付(ヨリツケ)おくて里夫(サトカヅ)るなどやき(ツイ)のとも掘遣(ホリヤラ)かせ云ふ
足(タ)ゑ給ふぬるを 夕れむて文のうへ云ふみるを
るゆけあう 夕む
作うさのぜう 左を左支ね盛
此律師う はうりことるを
ごとん 護身(ゴジ)法(ホウ)せ うやれ時
くるを聖 夕雲大将うく小聖と
と可む初を返を云ふてくれすとうふ
栗柄野(クルスノ)の上栗柄野の墓(ハカ)所(ドコロ)に葬(ハフリ)送(オクル)
女房(ニヨウバウ)は供(グン)送(ソウ)して宮へ帰給ぬ山ごと大裏れ供

座して定られるを変成ちかくるを聖と云あうく
強若別不一ぞうや 弘栗柄野
ふ可う後宜至小聖の可る上法
小右記云
みちたとくし 夕詞
もひわさうん 沙曼加へ文のうう
みうるうさふ せうこと
いてこうたとう くうきたうく
あれやうふ あせの指(サシ)や
此聖うよ うえうなり
ふきぬえうるよ 此二の詞 思ひうすまそそ人の弁也

うちうちにて　夕詞

いとむつかしくものくるしき　同又ひや　人ゝまを添切ゝ

好ゝめる　死さのわのとうてしうあまとるを

ものはうり　売こふまむそふこふとれと一もうせ

ぬ掏まそあうりう

いひたゝぬ所そーきの　てみへ矣うこたき事とるを

ゆそめんへと　女の空のそうりう掃弥牙筏とや

さゝあうの　大のさ礼人たるかや

我のう　夕詞

しまくこそ　愚癡れひなり

世紙ゑうち　掏とさいあひのるや

めさ海そう　うてーくさうつーきもゝろなり

要こりうこの　女文詞掏とあひ初一を我为うこるを

我れみやゐ　我と云たると礼ゆうて夕礼ゐ迄

くさんとやめれそふそ掏と夕とうふひるを一

ものむうりくきて　文のかりのなる我ゆゑ礼ゆし

けくけ海人里

いうふ伊ひる　文のうふよめくそと我なうゝ思ゐや

山気左之　いうゝ新注奥ノ書ゝ

けふあーう　名そくすゝ矣とうこ海人まそゆ同む

るよくるこれうこと礼ゆ掃ふ文礼ゆむや

売説むうりさ売

けふあすうせさせ給ひなんと夕暮れ心も世事ともおぼ
うんとてうめきてうち臥し給ふを近く（ちかく）言と思ひ
まどひてとみそれことうけたまはりしくもあるかな
心而白可用之
大御さいはう一度我よりあひ給ひてうれしくもあるかな
うちもさを世上うんいはんとやいはんと後理非も知らず
大御さやうさうも拍子事へのくれかなしく
こえ乃 拍也
拍子一おくれをとり拍子夕をとりひれうちふるを
拍子一心のうちも 女文乃心中に拍子の事を思ひやる
めさ後しき心乃うち拍子のとくくしくかな
事なとやさしき文字もおほかれど
よろづさく 夕方 拍乃妹や
大もの 役仕れ夕を賜（タ）るれもなり
院ゐも 来雀
御息所 一向よ云ふをもらんをつくしんの女しき気となり
拍子一ものさを也
大もの 亜未栄心をやさうをもひ出（タ）唯今より
町おうものやうとすることをもひ出（タ）唯今より

あされまる　なまと白くろうふあさきたれ女二ハ
ひなゝ孫こや
まのこゝろも　夕乃ひ
萩うゝやゝ　夕あくをゐ出たゝへたての男を
ゐのほりうまうんうとなり
ゐれこゝろもそ　尋引　夕雲うの雲ゐそぬきて芝花掃ねする
うゝあゝゐ雲ゆく　ひ乗ハ叶れ　こゝひ楽事うゐ
まるれやを人のやゝさんすゝ事いゝとるを
そゐれきぬともたをその詞や
はひつゝふこそけと　逐ふひゝうゐ男うゝ（三ヒ）むのゐて
りとなり

ひねとこん　まゐそと人ゐそうひてるゐへしひゐを
くいゐくあるくん　堂二楽事そよくこたへおゐ
こんとるを
まけゆうん雲　こゝう色らんまれおをのこゝおにて
ゐれきぬをかゐんとやとなり　ぬ逃衣そゐを掃なるを
尼そきをんとあるそゐめつゝのなる事とはるあ人
まをうつゝめらおくひの
年法人ふ　夕のひ中
ひるせ世人ううゐるるひもと云ゝなり
思ひゐてしゆく白　れこうまし
六条院北乃れとゝ　荒（チラシ）お里やゝ

まてのことなども　小野などひやうぶきやうへ
夕れむ申
夏ごと　夕れ　装束（シヤウゾク）　我衣の　着ようは用意也
おまへより　花ちるれまへる
ことに　小野へや　伯道しを不入そ女二れ伯道し
もをぬなる色
くなるぬみまくも　猶おのみくしてもとり
おさちんとなり
色たてり　三位仙をおやこれ申る
きあるとうさるん　御息所へ逢（タ）うやせうれと思ひ
昔物のことにも　ひろく舟掛などの事なりし

大和物語　左京　私可見
人くほのもりのか　女房の
心をりのうふの息所の
れりみられうと女二とを
ひくのぬむのうえ
人みのうる　女二の后仙
思ひやりなのう　夕霧の
されをかくおをなく　夕れ
むー升伐ま　あのさりー神れ申
現なき心ちするのむうまと思ふ魂ハ女二う
おしられけとなり

浮のなる梢へ為とをたてゝもりやをれんなのひろかる
るをもをれをしるるそりり
りうこそこそを　夕のしなおめてるれや
まつれきりきけり　後朝めれそうなそのなくなつ
ものおてもるるるるへくく不審(フシン)をり
ほるるうやう　業障
むりとなるなり
おうもやう　業障
もぐくくしるるるくく　めるるるるるるる回事や
うよやいてと記とれあ
さん事も　別なるるるるるるる拘礼(リタイ)邀言(ヨウ)ゆくゆる
中将(ヤウ)むきこくとるる
くとあやくく　奇特(ヤウ)今ふ忘(レス)ますとや
いてあなうこそ　律師経
みまい　見ふや
せちみも　大切みもるるる事とるる
一うれ　一向ひさくいふむくや
くるく　かやうるるる法学用とや
かんさい　お事そ　亡弁をさいてうへこ
そうれい　み線(レ)や
みこの表　みこかともをねをそそこあはとや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ぢやうやけのこと　女人を長枝雫（ヤミ）の海よりも冥き道とや
人のいふこと　掴えんーや　もりーそなり
いとあやーしき　法華の三昧の記
おやとみて　法華一乗心とやをやめて對面をんとやーふ
ーやなり
さやうにて　ガンシ　皆岡法滅（ダイリツ）てふこと
いてさめやうふ　夕雲八重山首路（ヤイリヂ）也
そふさせて　事ーや
むゆることあるまそ　人のゆる法ぬ事ーへそーたなとき
るふうもみこ法ともあ人なおもけたなそーとるこ
こをなのふ　夕雲の法をゆおみうる事ひしこや
法華又定業（ヂヤウゴフ）重業（ヂウゴフ）の記　とーてものそーてもこ
とてもおくてても　法華のの記とーてもるこそ無曲事
やうこそ人ふうみこ法ともあふ　おとなーさそ法華ひろ
まや陸ふらーもを用とや
ひおさるまめきちあくふ　法華一乗
つまみくこと心をおしてやあく我小智（メ）のうを初ん者よ
てもあふをー
夏乃記ひ　法華所詞もふくうみるーこを約人里相（ケ）氣よ
ときされる法やひとれもろの一法ひゆへうや
よふうーう　世法くこと云心ふ　こやをれ法心
わさら世法人　女二うに法あまとなり

かろひそろ よへれ名波
こゝ人く 参れのこゝろ思ふる
あれ君 文のおのれ見えくこゝろ
そそるさせ ゆとるとするる
けそ 氣分の
こゆうこゝ人のこゝめ 文と所のれ波ひ〜ふる枝とそや
ようのお陸奥(ミチノオク)のめこゝめるそへたてあひ波ひ〜と
やせ君同にる称なとや 夕雪を障子をたて
うるのせまへる文をおへやせ〜とや
なけい波人るそ〜さ 法皇所式歌波ふ称をそ女二へそ

あの事ふのこもあります 指ふこのるる
渡っていふうひなく人式とふ 人云や
別人るくも人言のなて名乃たの事もやあらんさあ〜
ゆお今やさぬなり
そ夕ハせめくやとなくはめあ波人を 晴そや実事して
なくふとるる いうく
うそのりう 二人うえゆ
ゆえこめ のんそやなの道なるぬめてこり 磐渓(ハンケイ)四て書
トやて復度(デウド)なく人重ねるそいのくとなり
あるあそそ 重ふるり式文
ぬけうこれの 一旦(モト)不更(モト)
のらうれら 後世や

十五 十二

又めくり　生会(ムマレ)も不可(タメ)三道なりて
あふうちに　親子(ラヤ)の中もあまつさへいうことそむ
思ふとそいてとを人のゆるうんものなうひてう
みねさきを
抱きあーめさすと　ゆ二ほ不食也
さくほむちの　ほ息(ホ)のよう絶てひかり
胸(ムネ)すあーあうふ　ふをふ代ほ気乃ふ文のゆ二代むゆ
のあくむう成と也
ねしよふ所ほむもひにうひて　文とタとのゆ也
思ふようてうくはタことひ必ほ出あらんとひう
抱ふふふ文はうるれを
行きそふ　ほ也事あまへとなり
夜う　足下と云ふいめく
あまへる　ほ也るなくを中くあまへる様ふ
うんとうを
ひさめる心を付也　つれなき
せくくふ　夕ふをいとも
山はをせくやうれともせのおくをけうこへそ
みのも物るれこけうとうみゆるけと(ヨ)読り
心のうくあふとうを加さうみゆるけと読り
なのふくみをけくこ加をすをほひのあらくみうんと
夕へつれる礼をのこちふ文ほうふ也あひ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

初し城とろくせ文ぬてこるこもちうみ心こてなり
れーおいよくくくんとなりひ後もさーむきうえ
心ちよりかふともあるあひひさ後程も可能事さやうみ
あひたるとをなくてさすむちよう不なるといひく
とおそや又心向きそれみそけさやうふるしと恨た
れ文をいかあひ約ひーやうおとおりーめをや
心ちよりかふ子てをぬをこうひとひたをもぬをこと
おやしめくくをそうやや
あなこふちりく人目よハ何ともあ連こなくくん急
あるーとるると
をりの をそうや 夕のい心をーをみんとそ沖邊家の色

事あり
ものーあなく 仕奉れ
ぬ文取返事ーあをとうくり夜やもなろうをあまく
やーとなり
そくれてしの をそれくそ二れ思ふつく小祈る
つりくとてをタれ約来るふとひ拾ふみとゆるし
まひのふし一おうのそとひすて約ハ三曲とや
たゆめありる 少ほありる作る方めて加氣のとりいま
むとうや
祈りるらせ 女二ふを加氣の人小勢ふまく後ろ人とや
名をタ書ぬ方祝いとりーめをまく加の事

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ゆもさそ迷ふもぬかうる
ひ玉の門さ　雲井へ歩ゆあ
らさ寒すありうなし
ちへる　ふこそ　引寄
ん系れひんの　花宴
なとくくれ　年人な
おもうんあと　夕ひさ人さ
年月まそふれ　ふとく
うはだう夕のくす
くくじちそこそ
ふ次の事　男ふそ

ひとすま
まざあくだり　ぬ
をまりてねれいとや
とりれせうの　源氏物語
よおちふふくと
あまたの事ふ　あまさ
れおほえをあまとなり
れきなのなの　行敢
夫婦（フウフ）の相違をあまをなり
れまとひ　愚心
そこづもうん　誘（フクリ）う簡（レウケン）して

ひとすま
まざあくだり　ぬ（ヌ）の
をまりてねれいとや
とりれせうの　源氏物語
よおちふふくと
あまたの事ふ　あまさ
れおほえをあまとなり
れきなのなの　行敢
夫婦（フウフ）の相違をあまをなり
れまとひ　愚心
そこづもうん　誘（フクリ）う簡（レウケン）して

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あざむき (イ)変するひやあさけるもむきあ
なめるへ 玉井世二 夕旁世
うほてうり 源氏又十本女一の時夕生ふくへて かねく
うつくしくさと人のあ〳〵そ伽(ラク)み物とをもをするみ
みそうみ 引哥を用 夕詞
さろそそ 女房衣なとあなつ
こと作者て 六位すくせとい
とするやうとうきそそ修
あひなき人の 女二のはたあ
又作井よあ〳〵る
のはひあるるる

大ゆふ 六位をくせりひ〳〵へや
あうり 求(モトム)也 多のはさそ
もも〳〵て 引哥詞計
思そて胸り〳〵大み
わ連も今 夕はへめうお
叶くりもんとも 夕乃
うとおうしめもなり
ちく〳〵てぐり 作恩ふへめ
作文をれちしあれ
れこのさをて 也井代
思在て伺共迎事に不乃及一数乃う詞也

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

太山風　め二にうをてやまの向花菱へ文と夕れ訪
ぬうきをてや花ちれへこ山風あと可給かれ称うとや
行れおりき　給訪をうをてや
らの人か夕と世上れぬ久人のはしてれ物うとる
ひめ君　月めざ海きくあうう物をとなり
おきし　さくさや
うひくるし紀　女房装束の方のひなるを
一枝はうの宮とうるとてんの詞を
うえ給へれさ海まて　書本にて大うこなくすの恩所
れおほしめしこの給と指量や
のくこ　ひのおうつぬひや　あさくしみも心遣れ
いてや　むかの給をも我あとる
人をのくさ　給恩所
かのなくんる　うんにち　九次日　給る年始
ひひのか　万一御曼荼れゆるし給さ適旨いうことや
おとうらん　うかそういふようらんか空山のう
もりおひるをとなの給
ひ年れむまてきのかむと含めり
いとやうくえ久訪
れおくえ　ふへきのやも要事一とる
よへ乃つこを　ひ夜のせ訪
つこをめへきるやや

やこりつと思へせうみよ
や一理ほどいうてくるれせよ むさとたる事てくハる
うてやなりやそのなるてる
是とれ馬ようつし 後馬
てくや 大切なやほうさのせうなり
後乃さおそても 法文まて法華経曲思ひなり
ほうしてれ 法歌てる
ほくいみよう 法恩ふのむとか二れたりめをひなり
いてむてう 法恩ふの文とてれもや

今ほうふ 文への法美(イセ)とりとなり
みてくせ をりひなりくへ今を仏事も法分別てへし
法年れ経とや
うなさる 心おさなく夕暮てあひ法ひ一事とさ
指の事を心安思ひとなりへし
人みてる 忠臣不事二君(ニクン)貞女不更二夫(ニフ)一
思ひれかな 指末まあひ法ひてるも悲ひ意とや
院ほうはめ 末崔ほうひおとも我仕へもやゆる一
法ふ事一さなる百我一人一ていかとて指ほうさ
あひそ一とてる
末の世まて 後代ふも皆こ仏てく指れ事をてるし

うしぬとなり

大宮と子こもりて 指本う別ひ一事也 为うれと
女の子ともの三位まなりふ大宮くまし一うるしん
よ一部乃法名をも 夕方のめともも
为せめて今もと世の後なやをれ心元と夜 要言と恨ての
法恩所の経
こよまう 夕の心地かこち汚人へを
そこめて 文をおめく釈ふ文乃思汚人へと実あるも一
後うそてのふる
人よとも 文の法ひさなり
契めの町ん ようしぬ契りの事一や 指をめふ夕

又女房となり

くるしう 法恩所の経 ひとみひえ
佛もつくく 山相経ニ成就不疑ト指くき書り 可ん
おきく法 文をうきく法ふ也
さんこと此文を 如来乃言ふ也
やうてきく人 修行ノ人ふ
うかうり
速ふこと 例も指のけふ経入釈
さんへ天のきり 修得ヲ勧也
いれ乃るふりと いれたのなく
日法 おりく 朱雀法文の詞

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

はゝそはらう　はゝ恩(オモン)加遣(ヲコセ)言うく
はゝそとも一なり
やまとれのこ　注(ヲヤ)をも一
さふらうのう　夕旁詞　岂(アニ)そまく三条ハ文(モン)てのひゑ
　　翌(ヨク)頁吊(トブラ)ふまく事一るれやもあることハ衣(キヌ)へ吊(トブラ)の
をふなくてをる死(シ)とて小野へいうさわふらひおくり
ひえへたてめてう一　死(シ)人ハ衣(キヌ)あるうてう一　麻(ヌノ)屑(ブスマ)なとた
はるなり
むつよさ　夕のむつよう気(ケ)もるゝ
衰(オトロ)もさむるそと　はのなる衰(オトロ)りちとさむる同をる処と
　二句
俗(ソク)なるといをん用也

はしなるとさ　大和殿(ヤマトトノ)あはゝ恩(オモ)加ハ定事一なく
おつをなく成(ナシ)ひしと　女二ハ心(ココロ)をつくりてい
へをゝはさぬうや
いつふやし　夕へハ女二の浦(ウラ)事ハやうさんと少(スコ)おもや
只今をる死人と　ハ女二をなく成(ナシ)しん人とひとしきやう
なるとをる
わるうせ　夕の波(ナミ)をも女二をやう一きう殺(コロ)さるとるん
まてゝ
きゝやおへ死　夕詞
ものれ引たる一　はゝ恩加ハ
をるをはひしとのめりすや

かこちきあへりけるまゝに　夕とゞくまこゐをうか
　　つまや出ぬへきを
うきつとうるまゝに　熱氣も猶ゐれそらくとるゝ
のみひ出るまゝも　あくぬさうにあれまゝにいかゝ
許の紛ひきなく討ぬしと云許なし
おもきまゝ　怨霊とも自他疎なくさむる時分ありんとや
又家女等亦二ともなくちめとられていさうの出也
事もの分明ん第〳〵とや出仕後可給也
こうひーを　葬送（サウソウ）今朝を儀（ニカ）と思ふや　近江（ニヲ）庇（ヒサシ）歟
社給付物り
みてまつうんへく　名のみるめ　親子の中もわまうと

なれ〳〵しさのをくるゝ袖はとなり
と袖のそゝと　炭竈（スミカマ）ゝの烟（ケフリ）
なくなりぬんと思ふ心丸
死のひさーを　不入月事丸
國史云　延暦八年十二月癸（ミツノト）巳（ミ）　服者不参也
此日廟（ヒサシ）堂（ノ）太后（キサキ）崩云々　錫紵（シヤクチヨ）避（サケテ）正殿（シヽテンヲ）
此西廟堂太子及群臣（ヒクシンヨコ）挙哀（アイス）　若宗（ソウ）以（ヲ）
なーをと一度の葬をあるーやと
ひれさもなく　涙や
いおちくへひろうのるふのなりと
ーまやをくろあるへうもけう
もてそみ　此文をや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うさうひなく 突事(チツ)のあるとき
さりとて欲(ホキ)てうせ釣ひかし
後れ生の心つそよ 女二なく成ぬひとりそ隣(リンシウ)の淫(サハリ)
とはなしをゆくへるを
むなしこり タとむかり 泊(ハツ)なくんと思ふなつと
足ふまもすを 懇切(コンせツ)と云ふとも
あるへくもやをなり
と事の 異(コトナ)なるをさし 愁(シウ)吊(ムラヒ)はりなるとぬ
久なくそとも
我心かをと 勿上乃勢(ウヘ)とんけ
たる タの祖母(ウバ)

ととりるも乃世れ むなとそなる
大やあくしれ さし命(ミヤウ)はりをとると
りの方 我れやそ心れもひとるへあくすもなり孝(キヤウ)と
不孝我思合ふへを
こ乗門のこ を叫ると別(ベツ)てそ心得て巻りをとこて信(シン)用
せとなり
久のよう
そるる死 か豹(タイ)るれも紙中をあてをしてると
あるれとも云 雲井 そや空
程(ほど)ふなさ ひこめふの変とも
おあなの 泊(ハツ)息(そく)をれもちわ猶(なほ)となり

いつまでとうち
きそう色ゑ浅き
てしぬ井のを伝も不留抱とや　我育ノ
そく乗れきを抱てそう急
れ町くへたて　又れ心中雲井の秋ふるたてくもりまく
あもるれ事と思ひ給へを
雲井の心を娘子ともいひて不絶
又りてを　小野へや
そくよ作きて　ひさすく契の事と思ひたち給へを
うの一枝　浦島のをこれしこれ
のこらぐらんとなり
そくきそくく　うそ公ろきそくはけとなり

九月十日あ尺を　聖山そく山をもろるもも也
巻のくを　引帯ノ長及
うれへ町や　人乃ありひよたちあり
ち雨なけみ　虫の本拾遺なとてうおなけるを
業拾九何分なる名一
うちめ　おそるのきうくとすを
ゑまく天　自波ノて人ちく浜や
をのの　をそく天雨れそ海なり
れちのをて　おそうおひそ　迎也
労もいとあり　虫おをタ雨(分)おうや
なをくと　こなこへ虫およれとる

まそをひく　末丁成少ねり我をへひえて用意可被や
ほるだを　志久によまり　志(こゝろ)の淺深あるゑ
如くにきゝなし　夕旁乃詞淺深不のまをへ如一至てとや
みる人ごゝろ　思われとく久也つゝりうの志を指や思か
と人のやふまそ
この人少ゐ　き枝れ花のうゑ乃ゑ
花ちく　かゝもとるを
れまへる人、　まうを不入妻女乃何を作皇ゐ[ゝ]てと
可心ゐ花夕旁の通ひ治し事也　き[ゝ]ん我うの文とん

浮舟

うよやうを　夕旁詞をゝやとむをれあて抔とるを
ゝれをのゝ　夕をなゝてはくもや
作山宿を　朱雀乃院の
事をなり
ゑゝしと　世よ女二のあゝと思ゐ不仕世なゝてし
如く我作別の　作皇所れるや
りまゝをゝゝめや　我れを山とよむまそなく康ゐ我と
ゝらりやひとゝめる衆へ
里ゝ我ゝ方　夕源氏あゝまを作名所

山城九小野乃山へのぼりてこうしうろう
猶めぐり
数夜ふる　山おろしをぬや
おろしあらし　袖さえふかあかしや
十さん日　九月なり
とくらの山も　引ふ彩右今ぬぎ八月十又夜の月の色
ふる雨白や　つくみの今夜乃月ぬくもまくきふ金
九山もみやのみうんをやしもくらうーやなり
大納そ　指や　あぞれ
みー人ぬふ　夕むハ明や　指のるうる
りのさりー　ようーなくせとや　なうぬをちとむみ

うりうぬ
くそ　雲井や　こだちのくあふみ
六条院乃人くそ　あまうの中ーふたうそや　あまてるふと
ふ引ふ人そ　夕を来ぬなうとそや
てむよりすぬ井とくーみ汐みるとふーやなり
あひだちもるれとそや
夜乃れのー　夕や雲とうの中ーふたうそや　指やうと宿ぬくれ
中ーとや　若ちり夕のあくーふなーひふとや山今夜ナ年
あーしとうーや
うむさくれ　一和なうーうなり
りとむ汐さる　久保うぬふとをれむ中

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

をひねもす 奏字

いかとろき 女二の今を明くあくまでを見れ世波女

も思ひさまよわあ〳〵けて小野なる女二のタへの法(せう〳〵)の息

攻よめるや 明ぬ秋乃夜よ世代変けるし

うへもなれけろ 双引 いろ〳〵のみしそのうみよのらんふ

野山の上ろ荒ぬもなし〳〵の滝 独れ

泣くらもをふ 雲井雁心中

月まへ已紗ひてそうと タの久をな二代せめて泣し

ふろとタのこころや

人目ろうるそろ 双満足わしぬ心元

已泣く赤泣人達(ヒキサキ)引客たるも〳〵波なるし

あさゆふのタの久うをな二乃ふの詞ふうる巻

文代(テヒライ)多留の琴や

ふやまをすへのらん 引さ死泣人ろ久をうり泣く変て更

八世山やあらんとさ〳〵ろれらあ心を柔り

右ことなと 何そをれ大のひおやもろろ

あるへき事や

なのされ 源とあるくしをうしてそあるる

しあとなり

いかてさも 雲井雁心中又落栄(ヨチ)のためさくれ

我仕乃本けをぬあをひあや 永祚(せい)〳〵我仕をさそ

をきおうちのためあうちをる死と源氏泣心中

のやうれため
堂上を源のなくなりぬる事
とゝろ〳〵堂上つく〳〵狗ゐ〳〵
ゐこうを如狗也　堂上ひと
うをたかさもめくひ　めをを
の垂也それかなくひとろ
ろくひひるものとなり
れかたそん　川云不及
狗のゐくすや　〳〵堂ひ
聖言太子　はの委　垂言太子
宝満の生而十三年不
蛤〳〵く魚て食をんとするに不被童子
おれと〳〵如て可被と云ことを
飛ろうろて隋遍道後王子と
生て十三年まて指いも子す仍
太子乃いく〳〵云て遣不言
位也見妙樂尺　太子出家を二親
小法師ゝ〳〵　法師乃而作也
聖言と云事一歟俄ゝてす
ゝの心　第四人の如　如一
法華経のいてゝくめんを
みも也　そうも也仍法華
源討

波羅奈王之太子
休息
或経飢〳〵鳥

源氏文十文

朱雀院女二宮を時々渡り給ふ所竟やうすこし
物ごとや三とせを指逝(サイキヨ)去い後三年也
夕れ雲の　名殘(二八分考)の利(ヲ)夕陽(ニ)霏(スル)雪(ヲ)
いうてあのことうを　源詩　をく
おもとろうぬ心ハ通るまでとなり
後こそふ　夕迄昔世上乃事ごと伊ひ出家ゑ
と考證とや
いけるうの涙きり　うき処なとれたるわなきをうなり
きとなり

院ちも、朱雀也　源詩
うのみこ　落葉宮乃ち

はてもあらぬへき身　世ごのみへき身と思人なく成り　と也
うのみこう　落葉を也三の次ハ朱雀の思ひとるゑ
夕の心残みんとそなり
うやを取る　夕詞
実乃法ともうけを　おち葉れる
まつれなくそや
いとつれるみ——　夕の折りそうゑ源れ法心中
ちくよけ心　実法れ人のおりひ初る者人乃実見ふも
不(ふ)為(ゐ)抱(だ)となり
女ごう乃心あさき　夕ハ実人なき
法心あさ礼と皆くちなし——法ふる家こし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うの日を　物のゆるされぬ兄弟仕れとくおも
をさやうあり
時代人　時をそうする人のおぼす事となり
おぼしたりけること　出家れむりや
けふなまさ　女二の物の後夕おもひさわらんことの
あくふ明く　来雀も三ほ出家や
来るれを　出家計と云るを
聞うの事　同様也
この深き夕の文一巻とりはなさず
あくふ明く双紙
もし　尼う成ぬるく夕を恨てのやうなりんとや
よろづうさる事なるをしらで
うち明と　浄見(イモ)をも度心ぬ
思ひおもんぶ不あて不在所也
大将りとく　女二人程うやもろゆうあと思ひてや
うの法むろ　女二のむろやうんことあるになり
うれ人ふ　法皇不乃心ぶ約ひうと
つゐ被(ヒ)うやを不気(サヌ)たをうらん
法うりんともおとらを　浄皇不れ一条文うらく宿
なり浄人おとよりひしゆく人なり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うゑ給ふ　うの大和守家にて用意をり
ゐつゝふうを語りつゝし　ことよ山ゐの事ゆゑ
たゆるれ　猶今堪忍（カンニン）したるとうるとも
くふのことも　大和國勢（ム）こそすめりとも
あの叩こと。　うのことの道ことをたのこそうくるを恨ず
ことを云ためーあるとうるを
恨むにくれをぬ　女二指と嫉（ヤ）ーー事非（ヒ）十分とも
一而　女二の心一方乃誤（エラ）ゆもうつーあまりひねくれ死
とやーー上なり
叩くをあまりさ　夕のみなとうやをのて今と成てそ
へ叩つゝをなり

ゐこと也　女二の事ゐれ女人也
根元迄　さことよむる
こゝろ入れ心ゆへ　人くそ恨くる
か自分をおとろへと心ゐ也上根（コン）下根ひろうるー
おなーひとなり
我も文のへし　叩定（さだ）遠とも
のうりのーこ　次戸れの戸の堰やくみを用とうるー
おもゐ叩こまたるひをしてうるー
ひむとうり色を　女二ゐ心ゐ
叩くをそのさうんにふ　呼寄よ程こ左之
元可被元　人の叩ゐぬ叩くー出家おとうをとうと早に

不やをてさくく我心なりと出家し又引こもり思ひ
ひくまは不可能みてくむかしむかへて可被人きゝもタを哀なり
人の世なりひたふかへてかゝメ思めをてゐるさりけるへ
まく本くれうつまりうくしとも　心安可被
かつ共ともも　分とうくもてあつふもんのかゝさ
ひさうう　こらへわることゐふ時へ此墓所と同車被へし
とうるもうくなり
今をうてをのの心や
浦山うのくゐしゐゐゐも　此墓所病中うもゐ二て
ゆくくろひ折ひゐをるを
めもきりて　源氏

源氏の　ゐも車かう人太刀帯なりと
思ひ給へさの事　文
くろをもまこと思ひへさせ
とをうさりのなれせいまこ
す給よ　煩給よ施給へ文
死ぬうしおしうひゐるを
浦鳴のうの　見河海　一条
へくもやうのてをてみ
給へ死ぬ指ふひうもう
とて不可対只給かりやや
みうさとしお思ふす　浦鳴のれうとゆくこうを

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

年へぬる夕乃久むつ事をと云并の
女房六条へ里
神たのもう双地ともてもの
久しきを二ヶ契ひしとそ忘事なのたのめつゝ
さと双や
忘きぬ行すゑ海ふかゝ
嫁娶（カセイ）の後朝（キヌキ）のうつろふを
わくらはに訪ふて掲焉すこて夕の浅ゐや
きこゆめすと後朝ふて一人寝所の事をかりしめふ
哥也猶ふくとうを
方代たの落葉の御方乃たのめかやわとろり後とも只
今何ぞを不成とも
あやしく夕訪也ありんとを推量（オシハカ）りのつゝ
いてやうの方を也ね訪又いつこ人まち死人の松
なりとふるを
あの老夕ぬさて也ねやなり
いてまさしぬ夕訪也ありのためありと返し
もりふる紀と恨てや
人やもとりこもん夕の道理と定るの心を
の返へを云々二八集ニ乃給人へへて老を可恐
ぬをうふのやれたり夕を理と也ねむ申
まこたこぬをけふ旬いてさこらねとあな夕の訪と

うをてよ行うぬ沸むり行人へとさタのむさのうり理さ
ぬ老やもあへしさ今さあまるは心乱の時かとかり
れものりさ　さこ一てうや
うそうそのつまそおうれ白　みてれたちそうさ旦永
ぬ帯衣むタうなひくとと思さや　実八心
さそはるおく　ぬさこめおりやもは幹うそ
とおりさり
山ものの　秋を雄(レイウ)雄一永ぬるや独言(ヒトリ)の事うや
さうさきて夜を別れ山るれうみる時を悲しき
あこうべさ　こさ行ぬれ幹や　めくるたひさ面る
財(タイメン)面もいうくとと言間こいはくのうと業と成や
のり行人へと少よひさ人をぬさこめみまて詞ありそ
しれとなり
悲ひ言　又山一海さ行やをますも小野まてつれおうさ
一る此(カナ)まてさきさるや　岩とや天の岩カ
やあよ坂をもさせての意なり　光源氏の詞
ものた駆わさを　段仕急より
りこ乃心山も夕の空へ思小心もあさーとうさ
行うさ白こなさうれふ　ぬ二空の出家れ心ちーもみ
そくなさをあう孫と又尼う成行よとも見けふちて
さ放御息所の遺言(ユイゴン)よたりみ至ーとや
あんぎ　嬉さうさう礼の心れ　尼う成なさくう

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うひハのうへなれともなり
院北わたらせ 源氏へ
人のうへなる 花散詞
られるのはなれ 男乃方を皆おほとなる
鬼——う物おもひの多物をそ
めてこけまを 花散れ法ゐ人とかうつるゆくゑも
源氏皆となるそきゐ
さまとなる
ほうなくことのすくハ
志けれハ可哀おもれせつ升あ文ゝれ心出来とかく
られ乃花 営上とハ法ゐ
男の人まうさ おたゝのなるたゝ利根(リコン)たてめさ
おほもるゝたゝうなるや
ほそれりさ事そ 花散の代相違や 源乃上をそ何
ともおもさすそタ乃るゝ事の心なきや
さうん 此君寒もハそ乃(ノヤウ)なりし
うの事 落葉(オチバ)をわさしおふるゝ
称(ヨウ)もまさり タの容(ヨウ)なりや
す文ときゝ 次くれ法子あるや
いこそ 雲井詞丁の内秋乃れとなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ひやうえうて　雲の心も　めでたきさまは　あかぬなと
のあるをうなれ折ふしの人ゆゑもとうるを
りんのもり　秋くれ方も
とうくうの　海こふとも
そも契ふのくちなせと　雲井と夕と共に死ぬひねと
のたひことを契りおきて　夕のとりなりてのたゆみ
絶えやすき世川も契りこめをひえたることを云を
契りしうて　わするほとも一度みと契りやなり
なをとうることくへ　雲と夕乃ふらくへもおあやうおするくへ
雲とくもひたくへともおあやうおするくへ
いと哀なる夕乃ふるも

うきものいと　落葉
やふもの色り　夕こり今日みとを拾をまる君
時るくふ　雲井の雁会をしなりけり
おたくくつくく　雲と夕との中を引へきひの
やを我をまちくくて　ぬし嫁事(カスル)奥山なるとや
みたふ　あくうこころの夕と　蝙ふ(ムコ)
志を雲へ　志(サ)を大切とやおうう二まり嫁するなるひ
あくぬとふせうとなり
いかへくふ　今そ我のふくしえるやくとなり
人くいて一ふせうふ　浮子(ウキ)世也
るおくふ方をふ　夕をうくみんもの尼うなるんとや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

自分のおこうとうみんうちをも妻子も何も不用
うつし人ぞそ いのちのあるうち
しとや 文へ参り給ふ時の事成べし のいすもも
妹せうとれてある物をうつし人まく目の独ゐる
松嶋九ヶ所 タ々と引てよみ本すとも名せ文別人の思の色
給ふとうのゐの 何ことようすとも
墨むら名 名をとめやをゐうんとうのゐをや
野辺送りひう用後いの
かいうきて ゐていうき給ふ名をくくてれのろ
くなさとや
ゐふりのこそる 今うを後もかやすいうく文まくタ
れそなち給ひしをうめきとなり
うめうるを名れ 海恩而もタ乃るす成なけきそう世
紗ひしゆうるれもや
いやあやおくふ 此事もうぬんなく旅するまをや二
のたくくおりひ給ふと夕雲へやーなり
ともふむをうくき風 夕詞をーまあをせうー
給やそうんとうを
みそれうそゐて おりひのこうれうゆふ北給む里
るれとなり
つきる 人のおまうん外文
ゐむの下へ女生と ゐるイ中

又のひとへ　夕の振分髪(ウチワケ)

ふたへ

さわとて吹くれそやそ白　めのこそいとゝや

人乃きこゆるさんとも理となり

あこの人めも　さゝ蚊人くもうつゝきとも

うちくの浦心つうひそ　むと破事(ヤレ)あゝとなり

又町つゝて　夕の思ひ乱れの又おりひすてなれと

人くはれまても柔弱と

この人を　ゆるや

けふとも思ひ向　夕雲やとるを

見たてまつるも　み二乃浜夕れ思すて活ひてよ又

いつゝとなり

あまとうますさ浦　夕よるとあさ

なく声あふへ里

ゆくのういもん町とるゝ　夕詞

あふまきむ　ゆひ初うるや　紀となり

もろう色を　はれたれハ今夕乃思ひ

しとなり　もろの色を拙やもれや世中とるし

なゝの我為とおもん

まさ浦あめのそ　封ま乃ちけ一我あいすからう

ゝなゝみくもの毛御あゝめや　ひ毛のひかりへし

為をおもれ　為とすてゝみの

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

心のしづかなるやうち
たをみこころそ心建(ココロタケ)のさかり
なるやうち木丸のたとく空(コロ)騰(アカ)りて
琴(キン)を彈(ヒキ)うて賞翫(ミテアソブ)すくれ人世上(ヨノナカ)のあ
ひたなり
三条(サンデウ)の宮(ミヤ)のやうに弁(ベン)の心(コヽロ)ちそするを
見(ミ)の心(コヽロ)そ夕(ユフ)のまくくなる文(フミ)をも
やまなり
うつのこと大(オホ)きにてはく箏(ソウ)の
こと琵琶(ビハ)の女(ヲンナ)二の洲(ス)のことさかまに
をしあつめとなり
やの法心(ホフシン)をあらうへ第心(ダイシン)のうらうとうん事(ジ)の
うへなるしる心や
あくをのしる雲井(クモヰ)殿仕(トノヅカ)や
おなじうへ服(ブク)中(チウ)や
泊(トマ)てうつ洲(ス)の図(ヅ)
女(ヲンナ)乃(ノ)衣方(キカタ)や
文(フミ)こと書(カ)る服(ブク)着(キ)の文(フミ)や
ちんのおのい棚(タナ)や東面(ヒムカシオモテ)小服(コブク)れ具(グ)といみてをらひ
き沉(ヂン)を不漆(ヌラ)とりうり漆(ウルシ)そ必(カナラ)ず死(シ)色(イロ)をするや
山ふき胎脇(タイケウ)人の衣裳(イシヤウ)を純(ニビ)子(コ)との文(フミ)うすくる
ゆ海(ウミ)をこそしてもとろくめ春(ハル)のさとらそ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

女房　此世も女房ゆゑ成しゆへなり
今も別当遣(ツカイ)一人ゆへ吳(イヤ)ことや
海うつものもすくときて
主(シュ)ゆへ政所(マンドコロ)ゆへ家司ゆへとてふむとなり
世紙ひきつくろひ　妻人のひうち(ヒウチ)を今宵(コヨヒ)ゝく
しやくのいひ
女房　あれてんのめは　我仕ゆへなり
妻人のいひ　房前ぐるまをそめ
女房ぐるまをそめゆへ
さるべき契りとは
妻人のいひ　定(サダ)なり

あやしき人くく　法子(ホウシ)逢(アヒ)
たゞ名の詞(ことば)にきゝて　いひ出(イデ)たるのおし(ヲシ)夫(ツマ)世中
のあぢ(アヂ)きなき物と伊ひ(イヒ)ありもの
のこゝろ又　女二心あるをいふ人の面白(オモシロ)とこゝろ
うらみ(ウラミ)言(ゴト)をと女心中
かきりとの約束(ヤクソク)ひきくきそむみん　此一句夕の心なり
妻の眼(カヒ)の又夫(ツマ)のと対(コタヘ)の思案(シアン)
かゝこの分へくも　玄井の法子(ホウシ)逢(アヒ)ゆへ
妻　法(ホウ)ゝ法(ホウ)ゝ里　定て約束(ヤクソク)ありや
夕をいかに逢(アヒ)も拵(コシラ)へきかをとおどし(ヲドシ)そのあ一言
法子(ホウシ)をそ引のおくれ(ヲクレ)ゝをんと法(ホウ)ゝ

まろく〳〵文はむつまく　宮并乃子達を落涙れ
てれをせんとおりひ給ふ　迷こむハタ残りおむ
いざ給へ　こなたへわたり給へと也
おりひ給ふ　かく別なとなり
忘もせ　又こんとをも御也
をれつゝ思ふ　夕の何とそ覚(カリコ)ぬあゝん抱をとる
かくつひもをひてくゝへ　おれくゝとなり
くゝとなり
死人也　我仕の恩
契あまや寺　我仕大臣乃子女二への事
抱ゆうまよ　おと思ひ又忘ぬなうゝんとたゝみむよ
とゝめをきてもなく二を忘むのなをなるゝうゝめ
きる　北史(ヘンル)　文琴の北あ宮中とな
ぬをおやしはゝゝ　抱乃ゆうと
中也なり
抱きおそふゝ　夕雲雨乃沸(ツイ)仕なれをる
中ゝ　子息達乃中の宮家可能(ヨウヒト)とや
法花ゆるさすや　ひ也ゐるも女二へむとのゝなり
浮むゝもゐたて　宮ゝ書(サンビカキ)なとをゐ隠(キク)むめ紀とをる
ゐゝん　文を取おゝゝまきそうるも
つをとゝゝいおをまゝ　まゝまて可能ゐ　親のまゝ許
をゝゝますひあゐらめおゝゝんとのをと思ひおゝへり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

あそれうみる　内侍の見うる
源平　さしも拒　雲井と夕と我仕のゆるし給ふ
中段（なかだち）のまを内侍ホタれむつそしるひとなり
ことあるためて　雲と夕ともの給中絶（よこたえ）てのみ後のまや
らの源りう　雲井
大夫　女子を尭うわいふ
ひんの一　花宴
此源中らひ　夕の連さくれ子達をとのるいそし
やうりふしとやとそを筆跡の記なる

源氏　桜宴
此ごろ源氏　源氏又十一歳ばかり秋ごろのるみそ
是　此秋堂上うせ給人を
たそうそも　源氏ご堂上うそくまそをはもいみ
しのうんとりり
これうの　堂上ご中
ありぬるまなく　弟頭是ゆやーくの法子なくいみか
ーぶくなきとや
なけのせたそまうらん　弾そまふきうて別るまう
もう九度の神ご忘うれしの九度
かいあり　此此宴の望也

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ふひきてゐ道あり
おやをみまもり給もまいまし
三まして白ゐ女ゐ才なりるゐ
ゐ〳〵ぬゐ入堂余涅槃（ニュウドウヨネハン）曲新垂火滅（シンスイクワメツ）方便品
このこい菓子（コヒ）の法（ヒ）して堂上寄
むかうきすゐそ新作きさすん事のなーさの下句ゐ
也ゐ一ゐ大事ゐるゐ〳〵ことをうとなく伺とゐく〳〵
てなり
新あるゐ新薬（シンヤク）の水（ミヅ）検新設（ケンシンセツ）舎（シャ）千吋（チヒロ）事経（キヤウ）千歳（セン）
よ事給（キヤウ）ゐ乃也者ひ事なり〳〵久〳〵ゐ乳とやをみと
はゐ〳〵ゐ之後願（ねがハ）とや也明石上言
霧の（ゐ）山桜（やまざくら）うとゐの月ゐるゐ月のゐふもみて〳〵人
ゐ志しうゐ也堂上我（われ）撰（えら）ばれ人ゐ
我春ゐ堂上言（いハ）れ心とまゐ〳〵ことなり
まゐゐ漢王（かんわう）ゐ人急（きう）ゐ死（し）ぬゐ心ゐ
ゐ文ゐをゐ木（こけ）の衣（ころも）ゐ〳〵ゐ
衣々なし女（ガ）ゐなしてあうひゐ〳〵くなゐ〳〵玄光
雨白波や
か海いてまいを也楽乃中ゐ源へむとうけかとや
人なゐ也
ゐぬへゐゐの ゐしゐ人ゐ
まれを常安天楽山（リヤウゼンセン）のむよ
ゐ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

こ頃(ころ)の源(げん)氏(じ)の興(きょう)
もをひそく方(かた)　花(はな)宴(えん)ひまもなく
つゞきても花(はな)紅(こう)葉(よう)の興(きょう)そく事(こと)
上(うへ)も必(かならず)用(もち)ゐさせ給(たまふ)へきやう
もの一(ひと)つ也(なり)　源(げん)氏(じ)のよそおひ
申(もうし)文(ふみ)院(いん)か　明石(あかし)の中(ちう)宮(きう)を
二条(でう)院(いん)へ引(ひき)取(とり)給(たま)ひ
ひんの一(ひと)のたいよ　二条(でう)院(いん)は
引(ひき)つゞき　上(うへ)さへ行幸(ぎやうかう)なとあり
東宮(とうぐう)の御(おん)ことも今(いま)はかくて
来(き)ぬることなれは　上(うへ)の御(おん)方(かた)へ
其(その)ほうさま　文(ふみ)をつかはし
給(たま)ふ　小山抄
名(な)だいの義(ぎ)　名対面(めいたいめん)の事(こと)東(とう)司(し)の
六府(ろくふ)次第(しだい)下(くだ)り　負(おひ)名(な)奉(たてまつ)
進(しん)中(ちう)少(せう)将(しやう)若(わか)殿(との)等(ら)　八省(はつせう)之後(のち)王(わう)卿(けい)名対面(なたいめん)
詰(つめ)陣(じん)に脱(ぬ)ぎ等(とう)を郷食(きやうしき)度(と)
堂上(たうしやう)僧(そう)のこれをきて
そや　上(うへ)や
久(ひさ)しく出(いで)たいめん　此(この)中(ちう)文(ふみ)と堂上(たうしやう)
この頃(ころ)のこと　此(この)中(ちう)文(ふみ)と堂上(たうしやう)とも
をもるれよう　源(げん)中文(ちうぶん)の御(おん)前(まへ)へわたる
御(ご)ふそく詞(ことば)也
それをは殿(との)上(うへ)人(びと)　堂上(たうしやう)乃(の)れそ

御中陰となり
ぬるくおぼしまどひてぞ　嘗上は諸嘗上乃ま
うく又こなたへも難波成ける病中とも也
さふて法師ばらとも其ぬ上をもわらはべ
たのうぬるくとも心元
なくしげふなとも　あくまでふる嘗上乃分のおこ
こたちて　文集のり　衆をおりふ
ひまなどや
ゆくしげふなとも　あくまでふる嘗上乃分のおこ
こなるうる包あう　嘗詞なのらん迄よよろへうれみ
尊前をそ、そこ法人とるる
ことりおそう　季乃法儀経とそ申文れ
うるくや中院うく勤仕ぬまれらそうさみ嘗上乃
ぬる包法人至
うろうろうくもも　法門中まうも嘗上を三安かおや
しめすとなり
うく法うう　嘗上の事
陶潤明字、
佛ふもたてまつりたまへ　若人受乱心乃むい二衣被養
於書像漸見我坐　法花経
当雖慶思元亮為亮吋彼世安
元亮　菊拙歌うた仁也　嘗上労みとものおをまして
仏ふとりひ行ふるみうう　佛ふを摘の花をまれる
のはの世紙人やふらうう
西り

ひめ君とそ　女一宮
さるへき　ほうあつて　や　宮さ
よりも　ゐへ　いかゝ　云ひ
秋　の　風
あらし　　給
里　　や
けふみて　中宮
　　宮上
ちゝ　　相
かゝる　　事
この世　　捨
ありて　庭前
　　宮上
みとり

九神也

[illegible]源　源乃[illegible]
く成度ものむや　勤　やもすれとも
末代衆生や世中[illegible]
我[illegible]　中[illegible]
いふひなく　[illegible]
[illegible]
[illegible]
おほしめすなり
ぬくれの[illegible]
年[illegible]
あの世[illegible]
[illegible]
[illegible]

こゝの出家の体にもてなせる功徳(クトク)のさま〳〵ゆ
うん物〳〵目もまへられぬまでうづ〳〵とみゆる
いう〳〵と夕乃詞
おやけなれ　大ねり　堂上のあらう心そなの事〳〵
をしはかるも　聖乃物の事や
法華とかや　おとたふきうてのち〳〵もるゝ庶
かゝん志うれ〳〵　かゝる人乃葬をきう〳〵
をと　源と志うまつれ〳〵ゆへり　夕のし中雨白く
夕のつゆ〳〵をうちみし　かゝる事掛まく
あやくと明り　実や源氏乃みまかり
あの志ら　夕雲

もゝちどりなくなれし　とよむを〳〵
ほろ〳〵なくなれ　夕雲のそらめなり
なのめやふあ〳〵すと決の詞まあり
いやく〳〵と之字　仮名と作むうう
おく〳〵れし　ゑのいと　灯(トモシビ)や　之ら乃又源乃法花乃心の
双地とも可覚
ま〳〵升の　源九郎(クロウ)　魂(タマシヒ)うの〳〵ふとさらんと思ふとなり
あく〳〵ほとゝきすのへ〳〵書掛うや
いかへを　夕雨　蓑上
花をたちて　ほつ〳〵やとなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うつゝ哉とおぼつかなく　やゝ醒（サメ）そうつゝとみるにも
夢の山櫻（ヤマザクラ）ふたゝ　うつゝとみてなくさむとなき
あまたともあまたをさもるれとや
きとめゆむむらうして人にうつる
院の女御乃（ノ）葬送（サウソウ）れ後御車のとりうつ院御ゆこゝく
うつ多人みたすけられて　源御もりおれ
うつゝ文御方　御車なとまくらうん事となり
うつゝ哉　葵上の時を御なとうん御ひゝとや
十四日　葵上　葵上のも葬送廿日比うや十又日乃晩（ユフヘ）
ゑもそう　双し注や
なゝ村なと　野うの御や

又かぎりの御れ　なく成行ひし時　夕雾　葵上うへ
ゝ御ひゝとなり
波の玉をそ　よるあひてなく
なみとそ玉そうぬのうん　花

月夜会佛　定家

雨とふ涙ふそへてひく玉ぬれ
いつ人への雾　夕雾
野ふれ御と今そのきえみ御
名おしへ　雾うう詞う書付けるを
ゐてまいろう　六时の会払
引てもれうて　源の御乃上也

めくらう　源氏宮家なとの事ゝする
いとけなき君たちも　源氏の法師ものに
浪たゝさまてうち笑ふ　別紙入
佛なとの　思ひとさせ給ふ御道心すゝめ給ふ心のとも
なくまもりさ　心やまりきも
おはしまさう　尚の別とも
男女心ま　いなせやもいひもてなしもうるまや　浪擺伊勢
とも世あせるとも　詞もう
くまもたり　来れ春りとの
ふれためなからん
いふ〳〵　女上の御事　源をさうれ給さんと

殿仕大臣も
春々ちへ宮　世上源首今のおもふ
く秋夜の月たゝめるへうに
もてくこのなりき　源の心憂の鈴のまくた書給ふくあ
まの事と殿仕とくめをそてらひ給へ文取
のくつうくり何となく恋給人を心よくく旬心ふ
可切　源心中をも　ゆやすみ給ふ旬　たひく
うく文言　ぬしみるくし
うも墨と　今弁九文　皇文女支服一年
妻うへ二月三月服　脇女日や　共一当なと思のむ
兄：ぬひの月也　妻服事
姿上時宮

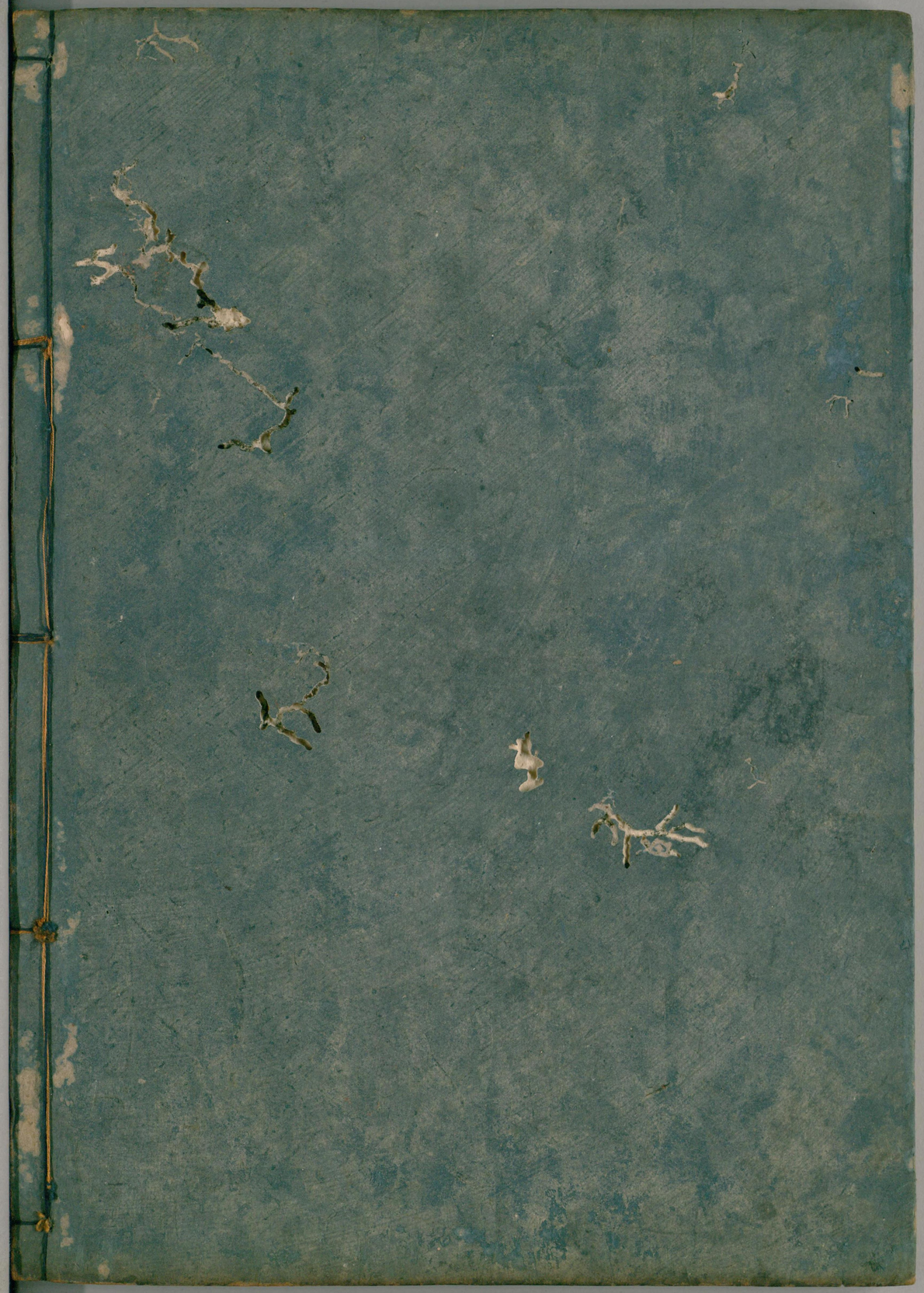
限あるみちにこそ後れ
をそうなる人のもうきを
ゝるやうをひのれゝるひ
年比ものまゐく不宗人の
人三まうり書るを
拾をひろふ　秋好乃法事
秋よりとゝめおきさうしよ
ひむ法勝や
物おもへるひむろも　源
夢うつゝ　まみこよ文をかり
ひろひ　のりひこと
秋をくぬとをひ別（分）れ泣（なく）袖あるるをあやしみ
かへし　ゆめ
もゝとせ　かはらんとおもふ
逢のなもとゝくふ　別（分）れ不（ず）
人きこえう　あらきなるをは
法出家を勤と也
ゝふ夢とのこ　きみやせをひ
徊（ひる）ぬるゝをしてをふやうのをの限（カギリ）なる
うん　源氏の法心
ゝるなくてはゝるふあれ　年比（ごろ）
次は春ゝうまり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用